
ハルミチル

ねむこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルミチル

【Nコード】

N 6 6 5 9 M

【作者名】

ねむこ

【あらすじ】

架空の動物、とくに竜が異常なほど大好きな花山 満（はなやま みちる・25歳）は寝返りをうったところでどこかに落ちた。そこはあたりを氷に閉ざされた洞窟だった・・・のだが、そんなことは満の目には映っていなかった。氷の洞窟で満が出会ったのは一匹の竜。これは一匹の寂しがりやの竜と、そんな竜を溺愛する一人の人間の物語。（R15は一応の保険です） 不定期更新です

00 主人公紹介

花山 満（はなやま みちる）

25歳。黒髪黒目。身長は160センチ。

体型は一般的で標準体重内。胸がやや大きい。

髪は背中の中ほどまでの長さがあるストレート。

服装はパジャマ。色はやや暗めの赤で、長袖長ズボンの上下お揃いのパジャマ。

ボタンと縁取りは赤と白のチェックで少しおしゃれに仕上がっている。裸足。

下着はパンツとなぜか実用的ブラを着用していた。勝負下着が良かったと思っている。

元の世界と竜を天秤にかけることすらせず、迷いなく竜を選べる思いきりのよさのある女性。

01 じつはパジャマ姿（前書き）

初心者です。よろしくおねがいます。

01 じつはパジャマ姿

王は言う。

あれを目覚めさせてはならぬと。

民は言う。

あれは御伽噺なのだ。

アルフラーレン聖王国の背後に聳えるカレース山脈。

そこに連なる最も険しき雄峰ロフリア。

遠目にもわかる万年雪と決して溶けない氷に守られたさらにその奥。
水晶の夢を抱き、あれは今も静かに眠り続けているという。

断ち切ってはならない鎖。

受け継がれる玉座と一つの真実。

そして王子は知った。

あれはまだそこにあっただ、と。

びたん！

そう、たしかに“びたん！”と音がしましたよ、私の体。

しばらく痛みに耐えるようにじっとしていたけど、痛みが少し治まると今度は丸まりたくなってきた。

顔（特におでこと鼻）が痛い腕も痛い胸も痛いお腹も痛い太腿も痛い、そして激しく膝が痛い・・・

なかなか寝つけずベッドの上で寝返りをうつたところに唐突に感じたのは浮遊感で。

そして“びたん！”。

何やら平らなものの上に、50センチくらいの高さからうつ伏せで落とされたよう。

体の前半分を感じる鈍痛を我慢して目を開ける。

これはベッドから落ちたね、と。

だが目の前にあったのはフローリングの床ではなかった。

白と灰色と藤色がマール状の模様になっている何かつやつやしたもので、ゆつくり、とてもゆつくりだが・・・模様が・・・動いている。

それはゆらゆらとして、まるで粘度の高い水流のような動きだった。

ヘンな床だと思いながら周りを見ようと、体を少し起こしたところで床の中に何かあるのに気づく。

とても大きいそれは濃い灰色をしていて大きな岩のようにみえる。

半透明の白と灰色と藤色のマール越しに間近に見えるそれは、よ

く見れば一つの西洋風ドラゴンの石像だった。
なんでこんなところにあるのかわからなかったが私の感想はただ一つ。

「・・・かつこいい・・・」

そりやもう何がつてあの鼻先！あの口まわり！あの顔つき！

一番間近にある眼を閉じた石の竜の顔を舐め回、凝視するように観察する。

うつとりしすぎて鼻血が数滴落ちてしまってもしようがないと思う。
慌てて拭おうとした右手は床を貫通。

ついで体も飲み込まれた。

かなり驚きながらまっさかさまを覚悟したのはたぶん一瞬で、ぬるま湯に浸かっているような不思議な感覚に体を動かすと、その中で泳ぐように移動できることが判明したうえ呼吸も問題ない。

となればやることはもちろん・・・

緩む頬を堪えられず、ニヤニヤしっぱなしの顔で竜の石像のもとへ泳いでいく。

ぺたりと触れた鼻先は石ゆえかやはり硬く、くんくんと匂いを嗅いでも特にこれといったしなかった。

それにしてもこの大きさは圧巻だ。

両手両足を広げてへばりついてみても、竜の石像の鼻面にヒトデのように張り付いているだけにしかない。

直に触れてわかったことは、表面が磨かれたようにつるつるつやつやだったこと。

とても肌触りがよく、少しひんやりしているけど頬擦りしても冷たすぎずとても気持ちがいい。

あまりの気持ちよさに再びうつとりとしながら、気づけばちゅーを

してどさくさに紛れてペロリと舐めていた。

うん、味はしなかった。

例えるなら、きれいに洗って乾かしたガラスのコップを舐めたような感触？

またしてもあっちこっちとすりすりしていたのだが、不意に顔を上げて違和感を感じた。

・・・あれ？眼って開いてたっけ？

縦長の瞳孔は黒く、瞳の色は青いような緑のような深みのある色。

じっと見つめていると、ふひゅーという音とともに脇腹に風を感じ・

・・・あー、これはもしかや鼻息なのでは？

そのまま目を逸らせずにいる先で、縦長の瞳孔がきゅっと狭まり眼を細めて・・・ものすごく、見られている・・・

そういえば表面の色も石のような濃い灰色ではなく、いつのまにか淡い銀に薄い藤色が鱗の端々にグラデーションで入っているような色に変わってて・・・

・・・えーと、どうしよう？と迷う間も、手は確実に竜の鼻先をなでなでしていたのだった。

01 じつはパジャマ姿（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました。

02 竜のほほえみ

「私、花山 満。姓が花山で名が満、よろしくね？あなたのお名前は？」

地面というか淡い紫銀に煌く竜の足元に下りて、見上げながらこやかに尋ねる。

あの痛みが夢なものか。

このステキ竜を夢で終わらせてはならん！

どちらが本音かはひとまず置いて、さらに好意を前面に押し出した笑顔で見上げつつける。

愛称は必須だとして。

どこまでなら触っていいの？

年齢差は気にする？

と、そこまで考えてハッと我に返る。

もしこの竜が誰かのペット、もしくはパートナーがいた場合、私はどうすればいい？まさかのお世話係り？

想像だけで徐々に落ち込んでいく気持ちに顔に出たのかもしれない。大きな体が僅かに身じろぎすると柔らかいけれど焦りを含んだような声が上がって聞こえた。

いや、聞こえたというよりは響いた感じだったけど。

『ぼつ、ぼく、そういうのまだで・・・だ、だからあの・・・』

こ！これは名前をつけていいってことね！むしろつけろってことね！！

一人称がぼくということと口調からみてこの子はまだ若いに違いない！

そのうえ男の子っぽいし！よしよし！！幸先いいわ！

どうやら産まれたというわけではなさそうだけれど、名前がまだないなら愛を込めたものを一発やつくべき、いいえ是非ともやらねば！

見た目はキラキラしていて落ち着いた淡い輝きを放っているし、瞳の色合いも南の海のようにとってもきれい。

よし、決めた！

ただでさえ見つめていた目をさらに見開き、大きく頷くとすうつと息を吸い込む。

「あなたの名前はハルミ！春の日差しのような体の色と海のような瞳の色から春の海と書いてハルミ！

ちなみに愛称はハルよ？私の国っぽい名前になっちゃったけど・・・どう、かしら？」

こんなにかっこいい竜なんだからもつと長い名前のほうが良かったのかもしれないけど・・・たぶん私が覚えられない。

それになんだか“春”とついてるほうが可愛く育ちそうで自分の中でポイントが高い。

そして“海”でワイルドさをプラス。

かっこかわいくて、ちよつとワイルド。

いい・・・！

なんかすごくイイ！！

若干ひいてるように見えるけど何かあったのかしら？

ハッ！もしかして気に入らない！？

どう断ろうか悩んでいるとか？

またしてもどんよりしはじめたときだった。

『春の、海・・・ハルミ、ぼくの、名前・・・きれいな名前をありがとう、ミチル・・・』

・・・ほほえんだ。

絶対、ほほえんだ。

全世界の人が表情は変わってないと言ったとしても私には見えた。目の前のハルがかわいらしくほほえんだのだ！

うかつ！

せめて恋人がいるかきいてからにすればよかった。

これでハルに恋人がいたら私、終わりじゃん。

心の準備もできなかったよ。

よよと泣き崩れる間も惜しく、引き攣った頬をなんとか動かす。

「は、ハルは、その、こつ、恋人とか、パートナーとか、ご主人様とか・・・どっかに、いる？」

たぶん私の顔色は悪い。それも相当。

異常なほどの速さと大きな音で心臓がドクドクいつてる。

そんな私を不思議そうに見下ろして、ハルが小さく首を傾げる。

くっ・・・追い討ちをかけるような仕草は今は遠慮してほしいのだから・・・

ぎゅっと拳を握った私に、ハルはふるふると首を振ると「いないよ？」と寂しそうにほほえんだのだった。

02・5 王子は苦勞人（王子視点）

「一年ぶりか・・・」

腰掛けていた椅子から一人の男がゆつくりと立ち上がる。

睨みつけるように見下ろした視線の先には、一糸乱れぬ隊列を組んでいる黒い騎士鎧を纏ったものたちと、少し離れて並ぶ黒いローブ姿の一行があり男はただ静かに瞑目する。

やがてそこへ向かうために自らも黒いマントを羽織ると、靴音も高く前へと進んだ。

受け継がれる玉座。

終わらない鎖。

伝え続けられる一つの真実。

あの日。

先王が玉座を退く前日。

先王の言葉に現王は絶句した。

それは王にのみもたらされる驚くべき真実。

しかし現王は武に疎く、どちらかといえば政に向いているといえる

ような男だった。

あれに武など関係ない。

頭ではわかっていても現王は耐えられず息子に漏らしてしまう。

息子は文武に優れ、またものごとを冷静にみることでできる若者だった。

民からも慕われ、その甘い容姿に多くのものが憧れる。

さらりとした金髪、理知的な青い瞳。

名をルシオン・クレスト・アルフラーレン。

アルフラーレン聖王国の第一王子にして次の王となることが既に定められた運命の王子。

伝えられたのは一つの真実。

それは断ち切れない鎖。

永劫の枷となる玉座。

黒いマントを払い、ルシオンは居並ぶものたちを見渡した。

「これより、ロフリアの頂にある氷の洞に向かい、古代種封印結界の修復と更なる補強を行う。

みななもの、世界を滅ぼしたくなくば気を引き締めてあたれ！」

「……はっ……！」

一瞬で誰もが死を覚悟したように空気が重くなる。

その背に負ったのは世界の命運ともいえるもの。
しくじれば世界が滅ぶ。

いや、消えてしまいかもしれない。

一行がただならぬ空気をまとって向かう先はロフリアの頂上近くと結ばれている転移陣。

アルフラーレン王宮の奥の奥、その奥庭にある転移陣への階段をのぼる息子を見つめて、現王は一人ため息を吐く。

今年も息子たちが無事に戻ってくるように女神に祈りながら。

転移陣の紋様に沿って淡く輝いていた緑色の光がゆつくりと消える。
ルシオンと騎士たちは、転移陣の階段を数段下りて洞窟の凍りついた床に立つと周囲に視線を走らせた。

もう一度あたりを見回し小さく頷くと、背後に控えていた魔術師たちが階段を下りはじめる。

手狭な洞窟は転移陣が機能するだけの広さだった。

入り口の天井には氷柱が何本も生え、床は厚い氷と化している。

おかげでごつごつした岩場を歩くような不便さは解消されたが、あまり長居をしたい場所ではなかった。

「予定通り黒竜騎士団のうち、お前たち五名はここに残り転移陣を守れ。」

他のものはオレとともに古代種のもとへ向かう！いいか！！くれぐれも気は抜くなよ！！」

「はっ！はっ！はっ！」

ロフリアの頂まではもうしばらくかかる。

幸いここには古代種が封印されているためか魔物も出ない。

あるとすれば雪崩くらいで、そのとき、ゴオオオという低い地響きのような音とともに転移陣のある洞窟の入り口が雪に埋もれた。

「……」

あたりに沈黙が落ちる。

ルシオンは僅かに俯き小さく舌打ちをした。

今日は一年に一度の古代種を封印している結界を修復しなす重要な日。

日程をずらすこともできず、今日でなければならなかった。

この国が、王たちが500年近く続けてきたものを、ここで終わらせるわけにはいかない。

これが失敗すれば待っているのは世界の破滅。

その命運を前に魔術師の魔力を無駄に消費するわけにはいかないが、ここに留まってもいられないと判断したルシオンは魔術師に小さな明かりを灯させた。

なるべくあれの存在を知られたくはない以上、よほどのことがないかぎり王都へ戻って援軍を求めることはできない。

今日ここに連れてきたのは古代種の存在を知るごく一部のものたち。実力も信頼も十分に兼ね備えた精鋭中の精鋭。

魔術師の灯した明かりの中、他の騎士同様自らも剣の鞘を使い雪を掘り出していく。

瞬く間に入り口近くは雪の小山ができ、防寒用の厚い手袋は重くなつた。

初めて古代種を見たあの日。

父王がともに来てくれと、本来ならば知り得なかった真実を知つた日。

一言で言えば衝撃だった。

今まで御伽噺と思っていた存在がそこに在ったこと。その大きさも。

天井が高いはずの城の三階あたりを見上げるほどの巨体。

そして石化してなおその身にまとう威圧するかのような濃密な魔力。近づくことさえ憚られるその重圧に、我知らず一歩さがっていた。そんな水晶と氷に守られし、石化した古代種を包んでいるのは古の魔術師たちが施したとされる頑強な結界。

それは白とも灰とも紫ともいえる、だが混じりあうことのない色をした不思議な結界だった。

その結界は、石化した古代種を砕こうとした十二代前の王の精鋭揃いの魔術師たちの攻撃すら凌いだという。

以来、無理に傷つけて目覚められるよりは と、結界を張りそれを強化し続ける道をとることになった。

雪を掘り進めながら少し過去に浸っていたルシオンが一筋の風を感じ、顔を上げた先には僅かに太陽の光がのぞく。

あれを悪意あるものに利用させないためには今までと同じようにこれからも隠し続けるしかなかった。

03 目指せ両想い

よっしゃ！これはもはや美味しくいただいちゃってるといってような展開ではないのか？

ハルに隠れてガッツポーズをとると、できるだけ真面目な表情をつくる。

「ハル、よく聞いてね？私この世界の人間じゃないの。これは確信があるから絶対よ。」

つまり私はこの世界でたった一人ぼっちの異世界人なの。

そんな私だけど、私ハルと友達、いいえ、それ以上の関係になりたい・・・ハル？どうして丸まるの？

ま、まさか私のこと嫌い？？それとも異世界人だからやっぱり気持ち悪いの？？」

ああ、言ってる悲しくなってきた。

いくら竜でも未知の生物とは距離をおきたいと思うかもしれない。年若いハルならなおさら・・・

丸まるハルに背を向け、しゃがみこむと右足の横にのの字を書く。でもこれのの字になっていないと思う。

丸を5回くらいなぞったところで、ハルの苦渋に満ちた声に振り返る。

『じゅん、ミチル・・・』

やっぱりか・・・

いいんだいいんだー・・・ハルじゃない竜探して脅してペットにして

『ぼくのせいでミチルは、もう・・・家に帰れない・・・』

遠い目で何もないうところを蹴っていた足を止める。

いま、なんて？

帰れない？家に？誰のせいで？ハルのせい？

「ハール？責任、とってくれるよね？」

うふ、うふふふふ・・・

口元に力を入れても怪しい笑いは消せなかった。

人生初のプロポーズがこんな顔ではハルも嫌だろうに。

笑うならもっとかわいく笑って言いたかった。

『せ、責任？そりゃぼくだってできればミチルを元の世界に帰してあげたいけど、ぼく一人の力じゃ無理なんだ。ごめんね、ミチル、ぼくがもっと・・・』

しょんぼり落ち込んだハルの足にそつとふれる。

「違うよ、ハル。私が言ったのはハルが私の恋人になって結婚して夫になって一緒に幸せな家庭を築いていこうって話。もちろんハルが私を好きになってくれるように努力はするしたまに脅すけど当然最初の目標は両想いになることよ？」

少しひんやりする鱗にへばりつきながら頬擦りする。
きつとハルはお人好しなんだと思ってた。

石から竜になったときにすら顔から追いつたり噛み付いたりの攻撃しなかったんだから。

そのうえ“自分のせいで”なんて私に言っちゃった日にはもうツケコマレルに決まってるのに。

わたしに。

ふっふっふ・・・

やはりこれは美味しくいただいてくれといっている展開だったようだ。

あと一押しで近い将来の恋人＆夫が手に入る。

しかもとっても素敵で性格も良い非のうちのどころのない彼が！

・・・それにしても出会って半時間も経ってないのにプロポーズか・

・・・我ながら天晴れである。

ハッ！そういえばまだOKもらってなかった！！

浮かれるのはOKもらったその後だよ！バカ！！

くるりとハルを見上げてにんまりとほほえむ。

「さあハル、誓いのキスよ！」

03・5 ハルのムカシとイマ（ハルミ視点）

あれからどれくらい経っただろう

溶けない氷と水晶に囲まれた小さな世界でいつも思う

あれから世界は少しは変わったのだろうか

どんなふうに変わっただろう

あれからたまに人間が来るようになった

年に一度と言っていたからしばらく数えていたけれど
特に興味も湧かず二桁もいかないうちにやめてしまった

やってくる人間から向けられる感情の種類はとても少ない

畏怖と憎悪

それは当然で仕方ないとも思う

あれを引き起こしたのはぼくの一族だから

人間たちはぼくが石となって思考も止まってると思ってる

ひそひそと話をして、結界を修正し時々強化していく

そんな結界あってもなくても同じなのに

出ようと思えばいつでも出られる脆弱な結界

少しいじれば結界を壊さずに素通りできるかもしれない

だからここにいるのはぼくの意志

ここから出ても一体何をすればいいのかわからないから

ぼくと同じものはもういない

ぼくに触れるものももういない

ぼくと喧嘩できるものももういない

世界はこんなに 暗くて 寂しくて 冷たい

今度きた人間は一人だった

今までは最低でも十人はきていたのに

一人できた人間は変な人間だった

ぼくに対する負の感情が微塵もなかった

あるのは純粹な好意だけ

それも今まで感じたこともないくらい深くて大きなもの

少しだけ、近くにきてほしかった

少しでいいからふれてほしかった

人間たちの張った結界をどうやって越えたのかわからなかったけど
ぼくの周りにある竜膜はたぶん破れないだろうから、小さく穴をあけて少し広げてみた

一人できた人間はやはり変な人間だった

いきなりのことにもぼくを畏れず、ぺたぺたと触れて、撫でて、キスをして……………なめた

人間が、

ぼくを、

なめた

あまりの驚きに息を吹き返してしまったのは
いくらぼくでも仕方がないと思う

04 罾にかかった竜

『・・・キス？キスならさつきしたよ？』

とても不思議そうな顔で首を傾げるハルに、さっきとは違つと言いかけて留まる。

・・・さっきのちゅーバレていたのか。
だが問題はそこではなかった。

ハルは勘違いしている。

本来ならここでやさしく訂正してあげるのが良心というものだろう。

ニヤリ。

「ハル、念のため、もう一度、しとことう？」

一言一言区切つて強調する。

につこり笑つておいでおいでと手招きする。

その手に誘われるように長めの首を下げてくるハルに泳いで近づいていく。

ハルの鼻先をなでなでしながら上唇と思われるあたりにちゅつとする。

ちゅつとした瞬間、たしかにハルは照れていた。

なんだかもじもじして瞳が潤んでいるハルは国宝級だと思う。
いいや、国すら超えたね。

世界の宝だ。

そこでふと気づいた。

この純粹培養純真無垢なハルがよく今まで無事だったなと思うと同時に、この純粹培養純真無垢なハルを数多の魔の手から守るのは私の役目ではないのかと。

ハルをなでなですりすりしながら、この大きな体ではどこへ出かけるにしても100%目立つと思う。

近所のスーパーに買い物にもいけやしない。

それにこの色。

どこの悪代官に目をつけられて攫われるとも限らないのだ。

そして夜といわず昼といわずあんなことやそんなことを・・・！

許せん！断じて許せん！！それをしていいのは私だけだ！！

悪代官お前は引っ込んでろ！お前には指一本ふれせん！！

頭の中で悪代官を撃退してから、ハルの瞳を見つめる。

「ねえ、ハルは私より少し大きいけど、もう少し小さくなったりはできないの？」

こっぴどいふうにはハルを抱っこして散歩とかもしたいんだけど・・・

「

誰かに攫われないためには最終服の中に隠すことも考える。

服の胸元から顔を出してるハル・・・うっ！かわいすぎる！！

ちよっと鼻息が荒くなってしまったが、どうにか心を落ち着ける。

少し考えていたようなハルの体がゆらりとかすむと、お座りして40センチくらい（しっぽ除く）の縫いぐるみサイズのハルが・・・
ごくん・・・

凝視している間どうやら息を止めていたようで、大きく一呼吸する

とそつとハルの両脇に両手を差し入れ目の前につれてくる。

粘っこいくらいうつとりと見つめてからゆっくり抱き締めた。

「・・・苦しくない？」

ドキドキしながら尋ねるとハルがふるふると首を振る。
うひゃ、くすぐりたい！でも我慢！

『ぼくの体はこの大きさでも人間には傷一つつけられないから・・・
だから、安心して好きにしていいいよ？』

ぶっ！！

あ、危ない危ない・・・

そんな好きにしていいいなんてそんな気軽に、えっ、あ、ちょ、ほんとに？

・・・だめだ！！

ハルはたぶん力の込め加減についてのみ言ってくれたに違いないのにいきなりそんなことしたらハルに嫌われてしまう。

もう少し、もう少しの我慢よ・・・

両想いになつたら必ず・・・必ず・・・

・・・ちゅ。

ああっ！くりくりした瞳の誘惑に負けてしまった・・・！

こうなつたら我慢なんて無理！無駄！無視！

ハルのおでこに再びちゅっとしてなでなですりすりしまくる。

あー、このフィット感もたまらない。

なんでこんなにぴったりなんだろうと思うくらい少し硬いハルの抱き心地は最高。

西洋風ドラゴンの宿命、お腹ぼっこりも少し控えめなハルは思っていたより軽かった。

これなら服の中から顔を出すハルができる。してみせる。

・・・服の中から顔を出したハルがこっちを見上げて小首を傾げる、なんて・・・

くーっ！こりやたまんないね！！

自分の想像にでれんでれんしながら、ハルの背中やしっぱを撫でているとくいくいとパジャマを引っ張られた。

ん？と腕の中を見ればどこか恥ずかしそうにもじもじしているハルがいた。

これもまたよし！！

少々鼻息が荒くなってしまったが、ハルは俯いていたので気づかれていない・・・と思いたい。

そんなハルがちらつと上目遣いで目を合わせると両手の爪先同士をつんつんして・・・

だめ、鼻血出そう・・・！

でも今そんなものを見せればハルはドン引きするかもしれない。

気合だ！気合を入れる！気合でのりきるんだ！

いや、気合じゃだめだ！ここは深呼吸だ！！

すーーはーーと意識して深呼吸を繰り返すと、いくらか治まった気がする。

よし。ミッションコンプリー！

少し気を紛らわせるために考えた内容は、この後無残にも打ち砕か

れるはめになる。

05 ハルのおねだり（前書き）

ご注意ください

相手は竜ですが、たぶんR12くらいだと思います。

05 ハルのおねだり

ミッションはコンプリートされなかった。

そして 私のパジャマは血に濡れた。

ハルの凶悪な一言によって。

もじもじとしたハルが、うるうると潤んだ瞳で恥ずかしげに呟く。

『……あのね、えっとね……?』

ちらっちらっとう目を合わせては視線を下げるという大サービスつきで。

当然その様を記憶に焼き付けるようにじっと凝視し、瞬きすることすら最小限にした。

『さっきみたいに、えと、ミチルに……なめてほしい、な……』

できる?してくれる?とその海色の瞳からひしひしと伝わってくる。

それは“おねだり”と分類されるものだった。
無論、私の鼻は血を噴いた。当たり前だ！どこで覚えたんだそんなこと！！

無意識に顔をそらして鼻血をハルにかけるのは阻止できたが、私の左肩は悲惨だった。

ただでさえやや暗かった赤が、今は黒くさえなっているように見える。

もういい、ついでだと右肩で鼻血の残りを拭いた。

ほんとに舐めていいのか、いいんだね？ハルがお願いしたんだよ？ふっ、ふっふっふっふっふ……！天は我に味方せり！！

荒ぶる鼻息をどうにか押さえつけ、ハルの体を持ち直す。

抱き締めていた体勢から、脇の下に手を入れて持ち上げた体勢に。

明らかに期待をこめて見上げる瞳が甘く揺れている。

ときどきすぎて手のひらが汗ばむ。

そっとハルを引き寄せ、ほっぺに口を近づけた。

そしてぺろんと舐める。

じっくりハルの様子を観察しながら。

『ひゅっ！』

短い悲鳴のようなものをあげて、ぎゅっと目を瞑り、一瞬全身を硬直させるとすぐにしっぽを振りまくる。

ぶんぶんと左右に振れるしっぽはけっこう速い。

どうだった？と目で問いかければ、ハルは嬉しそうに期待に満ちた目を向けてくる。

その間も振れるしっぽと表情で言いたいことは十分にわかっていた。

「どうしたい？」

答えなんてわかっていたけど。
その問いにハルは俯いて、どうしようかとても迷っているようだった。

『・・・も、も、もう一回・・・』

かなり悩んだのだろう。少ししてから上げた瞳が泣きそうに潤んでいる。

さらに引き寄せ、ハルの耳元で囁いた。

「もう一回、どうしたいの？」

『も、もう一回、なめて・・・』

とてつもなく恥ずかしいことを口にするように、ハルは今にも消えそうな声でそう言った。

自分の口元が笑みに歪むのがはっきりわかる。それでも。

ハルがそんな風にお願いをするからよ？と念を押して、もう一度、今度はハルの首を舐める。

ねっとりと。

『・・・きゃうっう・・・』

今度は甘ったるい可愛い声でハルは鳴いた。

ハルの海色の瞳が細まり、腕を縮めて手が握り締められている。

長いしっぽがぴんと伸びて、小さな牙ののぞく口が少し開いたままだった。

手の中でぶるぶるとわずかに震えて何かに耐えるようなハルを見て、ごろんごろん身悶えたいのを懸命に堪える。そしてこの瞬間、心に誓った。

ハルを人前では舐めないと。

06 不審な物音

どこかぼーっとしていたハルが、はっとしたように斜め下を見下ろした。

何かあったのかと釣られて同じところを見ても何も無い。何も無いというか、半透明の白と灰色と藤色のマーブルの向こうにあるのは氷にコーティングされたような不揃いな壁と床だった。どこが違うのかさえわからないのは、この大きくて丸い空間の外側の様子など記憶の片隅にも残っていないからだ。

ハルを見ればどこか緊張した顔つきでパジャマをきゅっと握っている。

視線は外を向いたままだけど、信頼はここにある。そんな様子にじんわりと嬉しさがこみ上げた。

『ミチル、いまから透過と防音の魔法をかけるから驚かないでね？』

そう言ったハルがこちらに首を伸ばすと、キスをするようにほっぺに鼻先をふれさせる。

その瞬間、ハルと私のまわりに一つのシャボン玉のようなものが現れて見えなくなった。

・・・いまのがハルの魔法。魔法なんて初めて見たけど、とっても可愛いハルの魔法はとっても可愛い。ほっぺにちゅ、でシャボン玉がふわん、なんて。

うふふ〜と一人ほのぼのしていたが、ふいに重要なことに気がついた。

ではハルが私以外の他人に魔法を使うときはどうするの？やっぱり

ちゅっなんてしちゃうのか！？待て！待て待て待て！！それは許さないよハル！！私以外にそんな魔法を使わないで！！
ハルの脇に差し入れた両手の指先に力が入る。瞬間、どす黒い感情が口から出そうになった。

『大丈夫だよ？心配しないで。ミチルのことはぼくが守るから。』

振り返って心配そうに見上げるハルに、それ以上は言えなくなってしまう。

答える代わりにハルをなでなでして、ぎゅっと抱き締めた。

ハルも短い腕を伸ばして抱きついてくる。ハルが心配してくれてるのはわかってたけど、いまは顔を見られなくなかった。酷い顔をしているに違いないから。

しばらくすると、遠くからガシヤンガシヤンと複数の金属がぶつかるような音が聞こえてくる。それは先ほどハルが見ていた方向だった。何かが近づいてくる。それも威圧的に。まだその影さえ見えなかったが、ハルの様子からしてそれは近づきたくない相手だと推測できた。

・・・もしかしたらハルをいじめにきたやつかもしれない。ハルに非道いことをしたら許さない！末代まで呪って祟ってハルに赦しを請わせてやる！できなくてもやってやる。苔の一念岩をも通すのだ！！

さらに近づく物音に、焦る心でハルをさらに抱き締める。

魔法のある世界だ。もしそんなもので攻撃されたらどうしよう？ま

だまだ若くて可愛いハルが自分の身を守れるだろうか？無理だ！名前もまだなかったような幼いハルを守らなくては！！そう気づいた瞬間、物音のほうに背を向けハルを庇う。

そのときだった。ドオオン！！という何かが爆発したような音があたりに響く。その音を背中でも聞き、ぎゅっと目を瞑るとしっかりとハルを抱き込んだ。できるだけ覆い隠すように。

爆音に気をとられていて、ガシャンガシャンという規則的な音が、思いのほか近くで聞こえたことにドキッとした。冷や汗が流れる。それでも確かめなければならぬ。

ゆっくりと振り返った先には、黒尽くめの怪しい一団がいた。

07 初めての嫉妬とご奉仕（前書き）

ご注意ください

相手は竜ですが、たぶんR12くらいだと思います。

07 初めての嫉妬とご奉仕

黒尽くめの一団は、怪しさ花丸つき満点の長身軍団だった。

しばらく睨みつけていたが、何かし始める素振りもないので警戒しながらじつと観察してみる。

他の黒尽くめに比べて割合近くに立つ金髪の男は、地面からやや浮いてる私とあまり変わらない位置に頭頂部があった。白い息を吐き出すその顔色は少し青白い。顎に汗でも伝ったのか、ぐいと右腕で拭っている。まさかの暑がりなのか？それならそんなマントと鎧なんてはずしてしまえばラクそうなのに。

次に男は遙か上空を見上げて喋りはじめる。同じとこを見てもそこには何も無いんだけど？それに男の言葉は聞き取りづらく、強いて言えば意味不明だった。何かが微妙。と、ここで気づいた。あー、言葉通じないんだ、この人たち。異世界へ来たんだから当然よね。でもそれなら良かった！ハルとは言葉が通じて！ハルと言葉が通じてなかったらストーリーカーになってたかもしれない。いや、絶対なつてたと思われる。

それにしても私たちが見えてないはずなのに無視するしハルの部屋壊しといて何様なの？どうやらあいづらは入り口を無理やりつくって入ってきたようで、さっきまでなかった入り口もどき周辺には瓦礫と氷の欠片が散乱している。

徐々に大きくなる怒りに、ハルをそつと体から離しその場に浮かばせた。

何か一言言ってやりたくて黒尽くめたちに泳いで近づく。少し近くで見た金髪はまあ美形だった。まさに絵本の中の王子様。ただそん

なものはハルにしたことを思えばこれっぽっちも意味はない。

マーブルの向こうにいる金髪が仲間と何か喋っている。ここまで来ても無視とはいいい度胸だ。後悔させてやる。

「ちょっとあんたたちねえっ！」

びしっと金髪を指差し、一言とは言わず怒涛のごとく怒りを吐き出そうとしたところで、腰にあてた左手にぴとっとくつつく感触があった。

はっと見下ろせばうるうるした海色の瞳が見上げている。

『・・・ミチルは、ミチルはその人間のほうがいいの？・・・ぼく、より？』

ハルの両手にきゅっと掴まれた指先に少し力がこめられた。勢いをなくした私の右腕がゆっくり下がる。そんな馬鹿な。ハルよりこの金髪がいいなんて絶対あるわけないのに。

何を勘違いしたのかハルはいまにも泣きそうな顔で胸に縋りつくつぶつぶんと頭を振った。

『いやだ、いやだよミチル！誓いのキスだってしたのに！お願い、ぼくを捨てないで！！』

ぶはあっ！！

再び私の鼻は血を噴いた。今度は右肩が犠牲になった。

ハルを片手で抱き締めながら残りの鼻血を右袖で拭くと、よしよしと額から後頭部へ向かって何度も撫でる。何に気が動転したのかはわからなかったが、きつとあいつらのせいだ。

黒尽くめに怨嗟の思いをぶつけていると、私の喉元にあったハルの頭がもぞりと動いてハルのおでこが首筋に擦り付けられる。

そして

ぺろんと。

ハルに、舐められた。

少しひんやりしたハルの舌は細くて長く、うつすら濡れていた。
もう一度、ぺろん。

『ねえ、気持ち良い？』

また同じところを、今度はゆっくり舐められる。

『んう、ねえ、気持ち良い??・・・んっ、ねえ、ミチルう・・・
はあ・・・』

舐めることに夢中になりだしたハルに腰が抜けそうだった。

返事をしたくても今声を出したらどんな声が出てしまうのか怖い。
あたりにはたくさんの黒尽くめがいる。見えてないわけなのに、
なぜかこっちを見てるものはいない。無視してるのはたぶん背中を
向けた小さなハルが何をしてるか気がついていないからなんだろう。
気づかれたら最悪だ。ああ！こんな可愛いハルを唆したとか籠絡し
たとか言われて絶対ハルに嫌われる！それにこんな状況を知らない
ひとに見られるなんて！こんな状態のハルを見せるなんて！！
そんな中、異常に興奮してきたことに気づいて愕然とした。
それにそのことをハルに気づかれた予感がする。

『ミチル・・・いつぱいどきどきしてる。ミチルはこうするの、好き?』

ああ！自分でも知らなかったこんなこと！それならハルにだけは知られたくなかった！！私は変態だ！！
長めの首を起こし、少し上目遣いで見つめるハルに後ろめたい気持ちでそつと頷く。本当は視線を逸らしたかった。でもそうするとこの後のハルを見逃す。

『良かった。ぼくもミチルにこうするの、好き。』

照れたようにぐりぐりとおでこを擦り付けたハルが満面の笑みでしつぽを振って嬉しそうにしている姿は愛くるしい。見逃さなくてよかった！うん、もう変態でいいや！

頭から背中を撫でると、気持ち良さそうに目を細めたハルが胸にもたれてそこですりすりつとする。そのままの体勢で数秒動かなかったハルが、下から静かに見上げてきた。

『あのね？あんなことするの初めてだったから上手くできる自信はなかったんだ。練習もしてないし・・・でもミチルが離れていくのを止める方法を思いつかなくて・・・』

少ししょんぼりとしたハルの瞳が瞬く間にうるうると潤みだす。

『ねえ、ミチルはぼくのこと、好き？・・・ぼくはミチルの心も体も柔らかくて暖かくて、大好き。』

苦しそうにほほえみ、わずかに首を傾げるハルにそつとキスをして頬擦りする。心の底からの想いをハルにあげたい。目一杯あげたい。断られてもあげたい。

「うん、ハルのこと大好きだよ。ハルの瞳も顔も体も鱗も爪も牙も

角もしっぽも舌も。ハルの全部が可愛くて愛しくて大好きだよ！」

そう答えてもう一度すりすりしてからハルを見る。これでハルと完全な両想いになったのだ。湧き上がる喜びで自然と笑みの浮かぶ唇にハルがキスをする。

夢見るようにうつとりとほほえんだハルが、そつと耳元で囁いた。

『・・・ねえミチル。ミチルが望むならばくはどんなことでもしてあげる。だから・・・ぼくを捨てないで?』

08 ハルの出来心

「もちろん絶対捨てないよ。捨てるわけがないよ。ハルがもう嫌って言うてもお願いどうか行つてって泣いて頼んでも捨てないから。それより私のほうこそ捨てないでね？私はきつとしつこいよ？私を捨てたらハルに一生つきまとうし、一生が終わってもつきまとうよ？人間の寿命は竜より少し短いみたいだから、ハルの後ろにべったり張り付いて離れてあげないから。」

うふふ、と微笑みストーキングの宣言をした。これで引かれても困るけど、ラブラブな今ならこれくらい釘を刺しておいても大丈夫だと思う。

目を見開いて、数秒止まったままだったハルがもじもじと見上げてくる。

『うん、ずっと、ずっと一緒にいてね？』

「もうー当然でしょ！このこのこのー！」

うりやうりやと撫で繰り回しほっぺにすりすりしてからちゅつとした。

今なら黒尽くめ全員の土下座と徹底的な床掃除で赦してやれる気がする。

「それにしてもあいつら、いつまで私たちのこと無視する気かしら。」

ハルを抱っこしたまま睨みつけるとハルが不思議そうに小首を傾げた。

『それはミチルとぼくに今も透過と防音の魔法がかかっているからだけど・・・あ、えっとね、いまかかっている透過の魔法はぼくたちの姿をそこに無いように見せる魔法で、相手には後ろの景色がそのまま見えてるよ？それと、二つ目の防音の魔法は音や声を外に漏れないようにする魔法でね、どんな大きな音でも外には絶対聞こえないんだ。』

ちよつとだけ魔法には自信があるんだ、えへへ。と態度で表し、はにかんで得意げにするハルに思わず頬擦りする。こいつめ！なんて可愛いんだ！！でもごめんね？あのときはハルのちゅっ＋シャボン玉ふわんに夢中でどんな魔法かしっかり覚えてなかったの。効果も聞かなかったしね。

そうか、あいつらには見えてなかったし聞こえてなかったのか。良かった。本当に良かった。

それにしても二つの魔法と一緒にかけられるなんてハルってちよつとすごいんじゃないかと思う。

この世界のことは全然知らないけど、この様子ならハルに魔法の才能とかけっこうあるんじゃないかな？

いまは幼いけど将来は魔法学校に入ってその才能を伸ばすとか、きゅいきゅい言いながら星のついた短い杖を振るハル・・・やばい、誰にも見せたくない！！って、なんで私は入学してないの！？才能がないから？それなら止めないで警備員さん！私は怪しいものじゃないの！ちよつと影からハルの様子を見に來ただけの婚約者で恋人なの！！未来の奥さんなのよ！！いいでしょ！？少しくらい！だいたい全寮制なのがいけないのよ！ハルがちつとも家に帰ってこないんだからー！

ダメだ！魔法学校はだめだ！！あんなに会えないんじゃハルが誰かの毒牙にかかるのは時間の問題、むしろ瞬殺だ！！ハルー！私を捨てないでー！！小さな街灯の明かりの中、ピンクの竜と二人で去り行くハルに手を伸ばし倒れこむ。ああ、ハル・・・そのピンクの竜子ちゃんは新しい恋人なのね？

『ミチルの世界には魔法はなかったの？』

魔法学校入学の文字が消えた。

つんつんとパジャマを引っ張り、ちよつと首を傾げるハルの背中を撫でる。どんなに思い出しても私のまわりにそんな奇特な存在はなかった。

「うん、1つもね。本の中や想像の産物の中にはあつたけど実際には使ったことも見たこともなかったの。」

『そうなんだ・・・じゃあ、ミチルに本物の魔法を見せたのはぼくが初めて？』

期待のこもった眼差しに頭をなでなでする。目を細めて気持ち良さそうなハルが、早く早くと言ってる気がする。

「そうよ？ハルが初めてだったの！ハルの魔法は可愛くって綺麗だったあ・・・」

思い出してうつとりする。魔法つてもっと呪文とか唱えたり杖を振り回したりするのかと思ってた。だけどハルの可愛い魔法はそんなことなくって“ちゅっ”だけ。

ちゅ・・・はっ！これよ！これに気をとられてあんな羽目に陥ったのだ！ハルにこのことを注意しておかなければこれから先、私の身がもたないのは目に見えている。他人に魔法を使うハルがその度ち

ゆっなんて・・・耐えられない！

「ねえハル。よくわからないけど、魔法を使うときって絶対ちゅってしないと・・・いけないの？」

きよとした顔のハルがしばらく考えると、ふるふると首を振る。

「じゃあ、ちゅってしなくてもいいのね？」

そう聞いたとたん、はつとしたハルの目がわずかに泳ぐ。なに？どうしたの？

ん？と覗き込むとハルはぎゅっと目を瞑り俯いてしまった。体を丸めてなるべく小さくなりながらふるふる震えている。なにが起ったのかわからず、なんとか落ち着かせようとその体を撫で続ける。

やっと聞こえたハルの声は泣きそうでも小さかった。

『・・・ご、めん、なさ・・・』

「・・・どうしたの？なんで謝るの？」

ずっと俯いたまま震えているハルが、きゅうつと手を握り締めている。その手にかぶせるように掌で包み込み親指で優しくさする。

『本当は、必要ないの。キスも、何も・・・でも、ミチルに少しでも触れたかったから・・・だから、ばく・・・』

くうーっ！！ほんとなんて可愛いんだ！！腕の中でいまだお腹を上にして丸まっているハルをぎゅっと抱き締め、そのほっぺに何度もキスをする。

おずおずと顔を上げたハルとしっかりと目を合わせ、最高の笑みを

浮かべた。

「ハル！キスをするのもされるのも私とだけって私に誓って!!」

09 人間の結界

当然私もハルに誓ったのはいうまでもない。

私の唇はハル専用、オンリーハルだ！！

向こうからは見えていないうえ聞こえていないとわかったので遠慮なく黒尽くめたちを観察する。

氷に囲まれたハルの部屋は、もともと大きかったハルとその周りを取り巻いていたマールブルのさらに倍はある広さだった。広さだけで天井まではあんまりない。

マールブルからけっこう離れた広い場所で、魔法使いのようなローブを着た黒尽くめは広範囲に散らばり、しゃがんで床をガリガリすることにより一心不乱になってるし鎧を着た黒尽くめたちはそれを邪魔しないような感じで壁際に点々と並んでいる。

・・・ダメだ。観察してみてもさっぱりわからない。

「あいつらはしゃがんで何やってるの？」

ひとんち来てまで落書きなんて一回叱ったほうがいいんじゃない？言葉が通じなくても床を指差してバツ印でもしてみせたら通じないかしら？

『あれは前の人間たちが作った魔法陣を直してるんだよ。』

魔法陣？と思いながら、ハルから黒ローブに視線を移すと必死な様子でまだ作業中だ。もしかしたら壁爆破のあとあたりからずつとや

つてたかも・・・いくら思い出そうとしても金髪と理解不能な微妙言語しか思い出せなかったけど。黒ローブたちのしゃがんだ位置からみて、これが一つの魔法陣だとしたら直径がかなり大きなものに見える。

『時間が経って魔法陣の線が細くなったところを、ああして氷に深く傷をつけてそこに特殊な魔法液を流し込むことで元の形に修復してるんだ。しかもその魔法液には一つ制限があって、効力を失う前に次の魔法液を注がないと魔法陣自体消えてしまうから、一年くらいでやり直す必要があるらしいよ。』

「ハルは物知りね！」

『・・・え、えと、ぼくがここにいる間、その、人間がちょっと話してたから・・・』

うりうりぐりぐりしてから聞こえた、ハルの寂しそうな声に胸が締め付けられる。石になってどれくらいここにいたのかはまだ聞いてないけど、きつと一人ぼっちだったんだ。そんな気がする。ぎゅつとハルを抱き締めて、頬をハルのおでこにくっつけた。

「一体、何をする魔法陣なの？」

聞いてはいけないのかもしれない。心臓が軋んでるように痛くてなんだかよくない予感がする。それでも聞いておくべきことだと思う。

『・・・ぼくを・・・起こさないためだよ・・・』

やっぱりかー！黒尽くめー！！始めから胡散臭いと思ってたんだよ！黒尽くめだし部屋に入るにしても爆破だし、あいつらこっち側見

ても友好的じゃ全然ないし！

きゅっと握った小さな両手を見つめたままハルがうなだれていく。小さな体がさらに小さくなったみたいに。

『仕方の無いことだけど、人間はぼくが怖いんだ。それに、いくら石になってもぼくが何らかの原因で起きるかもしれないと考えたんだろうね。なるべく外からの刺激を与えないように武器、魔法、人間はもちろん、動物も魔物も何も通さないように設定されてる。』

少し悲しそうに笑ったハルがどんなに孤独だったかなんて想像もつかない。つかないけどこれからは私がいるって伝えたい。伝えたいけど言葉だけじゃ薄っぺらな気がして、少しでも長く一緒にいられるように願う。あと寿命を延ばす魔法とかアイテムを探さないで。

ハルと生きるには何百年何千年単位かもしれないけど・・・延ばす延ばしてみせるよ、ハル！私の目的はハルだから！いろんな意味でハルだから！！

うん、薄っぺらでもやっぱり伝えよう。言わずに後悔より言うて後悔だ！

「ハル、起きてくれてありがとう！そしてこれからもよろしくね！」

抱き締めて頬擦りして、おまけにハルの口にちゅつとする。口への不意打ちには弱いのか、もじもじするハルはこの上なく可愛くてたまらない。

『うん。ミチルもぼくのところに来てくれて、ありがとう・・・ぼく、いまとつても幸せ・・・』

嬉しそうにほほえむハルを見て目頭が熱くなる。

くーっ！泣かせる！泣かせるわ！ハル！！私たちまだまだ始まったばかりじゃないの！それなのにもうこんなに幸せを感じてくれているなんてどんな人生送ってきたのよー！！そりゃ石になるなんて普通の人生じゃなさそうだけど、こんな幼子になんてことを！く・る・づ・く・めー！！！！

つんつんとパジャマを引いて見上げるハルに、黒尽くめへの憎しみが心の端っこに追いやられる。

『さっきの結界のことだけどね、あの結界はぼくの竜膜のさらに外側にあるんだ。竜膜との間隔はミチルの身長くらいなんだけど、あれに触れてたら危なかったんだからね？』

「えっ、そうだったの？」

ということは感激のあまりあそこで立ち上がって万歳したら即アウトだったわけね。でももう少しで絶対万歳してたはずだ。その自信がある。まだハルに触れてもなかったし、まだハルと何にもしてなかったのに。ああ、ほんつと無事で良かった・・・！

「それならハルがこの中に入れてくれたから助かったんだね、ありがと！ハル！！」

ほっぺにちゅつとするとハルはぎゅつとしがみついてくる。そのまま擦り付けるように顔をパジャマの胸元に埋めてしまったハルの背中をそつと撫でる。何かに怯えたようなハルを宥めるようにゆっくり撫でていると、ふと一つの疑問が浮かんだ。

「あれ？そういえば今のハルはあいつらには見えてないんでしょ？ハルがいないこと、気づいてないの？」

しがみついているハルの頭から背中をなでなでしながら、じっと見下ろす。

しばらくしてから上げられた海色の瞳は少しだけ弱々しかった。

『大丈夫だよ。彼らの目にはいつもと変わらない、石化したぼくの姿が映ってるから。』

「っ・・・ハルっ！」

ハルのほっぺに自分の頬をぎゅっと押し付けると、その谷間を一粒の涙が伝っていく。

石化したぼく、なんて平然と言わないでほしい。それも“いつも”だなんて。

私の知らない間にそんな魔法も使ってたなんて驚いたけど、ハルのことをもっと知りたいと、教えてほしいと思った。

10 最後の古代種としての選択

黒ローブたちが杖と手を高々と掲げて呪文を唱えだす。

しばらく意味不明な言葉でもごもご唱えた後、杖と手をクロスさせると赤く発光した線が床の魔法陣から伸びて氷の壁を鳶のように伝って広がっていく。ぐねぐねとした模様を描いていたその赤い線が壁を一周して魔法陣の反対側に触れた瞬間、魔法陣が一際赤く輝いた。

ふうつと全ての赤い光が消えると、それを見届けていたらしい黒尽くめたちが帰って行った。

入ってくるときに爆破して作った穴から。掃除もしなければ直して帰りもしない。

『これでまた一年くらいは来ないよ・・・』

その静かな声に腕の中のハルを見ると、どこか遠くを見ているような様子だった。

ぼんやりと黒尽くめを見送るハルの目を片手で塞ぐ。

あんなのハルが見送る必要なんてないよ。

あんな礼儀知らず頭痛と腹痛と水虫で寝込んでしまえ！そしてお粥を食べて舌を火傷するといい！慌てて水を飲みに行く途中ではタンスの角に足の小指をぶつけて泣け！泣き喚け！泣いても赦さないけど！もう二度と来なくていいから！一生来なくていいから！！

黒尽くめたちの背中に念入りの怨念を一回ずつ、黒ローブたちにはさらにもう一回ずつ送ってからハルの目の前から手をどける。

よし。まずはお互いをよく知るための取っ掛けりとして年齢の話題が無難よね。

ハルの意識をこっちに向けるように抱っこしなおす。

「ねえ、私は今年25歳になったの。ハルはいくつ？」

だいたいの予想としては10歳前後かな？

ちよつと考えるように小首を傾げたハルが、小さな両手で指折り数えてる。もーすごいかわいい。

ああ、この無防備なお腹にはぶつぶつしてみたい。ハルが呼吸するたびに上下するお腹の誘惑は半端ない。

私の鼻息が少し荒くなり始めたところで、ハルが両手を前に突き出して手のひらを広げて見せる。

指の数が年の数。そういう意味であろうその行動は子供で、内心ほくそ笑む。

「うーん、しばらく数えてないから正確にはよくわからないけど、たぶん100は越えてると思うよ？」

「100！？ハルは私より大人だったの！？・・・ご、ごめんなさい、年上ぶって・・・」

「えっ、あ、ち、違うよ！ぼくの100歳はまだまだ子供だよ！きつと！」

予想を遥かに超えてたけど、焦ったようにぶんぶんと首と両手を振るハルは本当に子供っぽい。

そうだよね、大人の竜だったらなでですりすりとか嫌がりそうだよね。私に触るな人間が！とか。しかもすごいプライド高そうな気がする。噂のツンデレとか言ってる場合じゃない。愛を育む前に命がなくなりそうだ。

良かった！ハルがまだ子供で。いまからスキンシップに慣れてもらえば・・・ふっふっふ、あーんなことやこーんなこともいずれ思いのままよ！らぶらぶ結婚生活のために私はやるわ！

薔薇色の未来を思い浮かべながらハルの片手を握ると、そうだよーとハルのほっぺにすりすりする。

では次の話題よ。次は・・・うーん、ご趣味は？って聞いても最近は何もできなかったんじゃない？あーもっと重要なことがあったじゃない。

ハルの心を抉るかもしれない、重要だけど憂鬱になる質問が。聞いていいのかなあ・・・？でも聞かないとわからないしなあ・・・ハルを撫でながら様子を窺う。

「ハル・・・ハルは、いつからここにいるの？」

ぴくっと揺れた小さな体が少しだけ硬くなる。

ハルがその頃を思い出しているのかパジャマのお腹あたりに視線を落としていく。

ゆっくり戻ってきた視線は少しだけ暗くて泣きそうに見えた。

『産まれてしばらくしてから、かな。』

「・・・一人で？」

『うん・・・』

泣きそうに見えてもハルは泣かなかった。

でもその落ち込んだ答え方が全てを物語ってるのよ！一人は寂しいはず、しかも100年も！！

ぎゅううつと抱き締めてぐりぐりすりすりして目一杯キスする。最後にしっかりと胸に抱き締めなおした。

100年も一人でいたなんて・・・

しかも年一回来るらしい黒尽くめたちはあんな殺伐とした状態だから話し相手にすらならないし。

あんな空気の中で一人でいたなんてハルが不憫すぎる。

そもそもどうしてハルを怖がるのか私にはわからなかった。こんな可愛いハルのどこが怖いというのか。そりゃあ元の大きさはちよつと大きかったけど、ハルは暴れん坊でも喧嘩っ早いわけでもないのに。

避けては通れない質問、よね。それにこれから先ハルと外出するためには知っておかなければならないことだと思っし。

「あのね？今からまたたぶんハルが傷つくことを聞くけど嫌いにならないでね。お願い！」

しばらくして腕の中でこくりと頷いたハルにゆっくりと問いかける。

「・・・どうしてこの世界の人間は・・・ハルが、怖いのか？」

そつと伏せた海色の瞳がわずかに翳っていて何かを堪えるように小さな両手を握り締めている。

やっぱり聞かれたくないことだね？ごめんね、ハル・・・ハルの手を握り締める。少しでもハルが怯えなくてすむように願って。

きゅつと握り返してきたハルの小さな手は少しだけ震えているようだった。

「・・・今からずっとずっと前、ぼくが産まれて少し経った頃に大きな争いがあったんだ。ぼくは興味がなかったから加わらなかったけど、それは古代種というぼくと同じ種類の竜の間で起こったものだった。何の前触れもなく突然起こった古代種同士の争いは日毎に激しくなつて、いろんなものが壊れたよ。街も、お城も・・・地形

が變わつてしまつたところもたくさんあつた。争いは五日ほど続き・
・そして、ぼく以外の古代種たちはみんな滅んだ。骨も鱗も、彼
らのものは何も残つてなかつたよ・・そんな、世界を壊せるくら
いの力があるものたちと同じ血を持つぼくが、人間は怖いんだ。仕
方ないよね・・だからぼく、ここでずっと石になつてようと思つ
たんだ・・・」

ぎゅつと握つてたハルの手に少し力をこめる。

ハルがそつと見上げてきて、ぼくのことを怖い？と聞いているみたい
だつた。

「私はハルが何であつても全然怖くないから！古代種でも新種でも
どんと来いよ！それにハルはその事件にこれっぽっちも関係ないし、
もーそんなことなら私の方が断然怖いじゃない！ーい？ハル。き
つとハルが思つてる以上に私はハルのことがとつても可愛くてかつ
こよくてこのお腹のラインとか堪んないと思つてるような変態よ
？ハルの可愛さにすぐノックアウトされて、いい大人なのに鼻血も
出しちゃう。見てよこのパジャマ。血まみれでどんな惨劇に遭つた
のかと思われちゃうよ？あとは鼻息が荒くなるのは当然でしょ？そ
れにすぐハルに触りたくなるし、無意識でも触つてる。ね、怖いで
しょ？こんな危険人物なんだよ？それでも私が好き？怖くなつた？」

じつと覗き込むとハルがふるふると首を振つた。

「どこも怖くなんてないよ？それどころかそんなにぼくのことを想
つてくれてたなんて嬉しくて、ミチルのことがもつと好きになつた。
一杯好きになつたよ？一杯大好き！！」

ぎゅつと胸に抱きついてぐりぐりとおでこを擦り付けるハルの頭を
撫でる。

「ハル、一杯大好きっていうのはね、愛してるっていうのよ？」

『あいしてる？』

「そうよ？私はハルのことが一杯好きで一杯幸せにしたいの。これが愛してるってことなのよ？だから私はハルのことを愛してるって自信をもって言えるわ。」

抱き締めていたハルを見つめる。

「ハル、愛してるよ。」

そう言っただけでハルの口にキスをする。ハルがまん丸な目をして見上げていた。

そのまま数秒固まっていたハルが両手をあわあわ意味もなく振り回すと、ぱっと自分の口を押さえる。

驚きと恥ずかしさがない交ぜになったような様子と緊張したようにぴんと伸びたしっぽが可愛いすぎる。こういうのが目の中に入れても痛くないってことかと実感していると、せわしなくぱちぱちと瞬きしていたハルの両手が伸びてくる。

小さな両手がほっぺに触れると、意を決したようにハルがぎゅっと目を瞑った。

『ぼ、ぼくもミチルを愛してる！』

ちゅっとキスをした後とっても恥ずかしいことをしちゃったと言わんばかりに、うきやああとかが言って短い腕としっぽで頭を隠そうとしているハルを目一杯抱き締める。

もーこんな可愛いの絶対手放してやらないんだから――！！！！

11 初めての魔法戦

ハルに乗せてもらって、やってきました城下町。
左腕にハルを抱っこしてお店を覗いていく。

ハルは透過の魔法を自分にかけてるから人に見られる心配はないし悪代官に狙われることもない。それに竜自体珍しいらしく、余計な厄介事に巻き込まれないためにも必要なことだった。

ついでに血ぬれのパジャマはハルのおかげで素晴らしい装備になっている。

いくなれば竜の鱗セット！

ハルの鱗一枚とパジャマが合わさって、赤い長袖ワンピースとルームシューズのような黒い布靴になったのだ。

これがこの世界の一般的な女性の服装ということで無防備に町をうるちよろしてたところ。

「なあなあ、そこのお嬢ちゃん。いい話があるんだがよ、ここじゃちよつと、な？」

ほんとにいるのねえ、こういう手合いが。
妙に感心すると、ちらっと腕の中のハルを見てから素直について行く。

つれて行かれたのは 暗い路地裏だった。

「お嬢ちゃんはバカだなあ、こんな簡単に知らない人について行っちゃダメだぜえ？さあさっさと出すもん出してもらおうか、んん？」

げへげへ笑った顔はかなり下品。

丸いボールをちらつかせながら男が一步近づく。

何あれ？

とつても自信満々な様子からただの町娘を恐喝しようという魂胆は丸見えだけど、その右手で上に放り投げては受け止めてる赤いボールはただのボールではないの？

「ちよつと、その丸いのは何？」

ボールを指差して尋ねると、男がにやあつと笑う。

「これかい？これはねえ、お嬢ちゃんが言うことをきいてくれなかったときに使うものだよお？」

ひひひつと笑つてもう一回放り投げる。

「ところで、いい話つて？」

「わっかんねえガキだなー、あんなのはう・そ。さつさと金目のものを出せば助けてやるぜえ？」

「・・・はあ、やっぱりね。それならこの話はなしよ。」

ため息を吐いて男を見れば、下品に笑った男が右腕を眼前に突き出した。

「これを見てもそんなことが言つてられるかなあ？」

振りかぶつて勢いよく振り下ろした男の手から赤いボールが離れる。

「弾けるおっ！！」

飛んできたボールが男の声に反応したのか、すぐに割れて中から赤い炎が噴き出した。

舐めるように伸びてきた炎が目の前30センチのあたりでふしゅうっと消えると次の瞬間、目の前30センチのあたりに渦を巻くように出現して男に踊りかかった。

驚いたような男が横に転がったけど、避けそこねたのか頭頂部の髪がちぢれて煙が出ている。

「ハア！？まさか反射の魔法かつ！？そんなものいつ使いやがったこのアマあ！！」

体を起こしながら怒りに満ちた声で男が叫ぶ。

そっちが仕掛けてきたんじゃない。私は何もしてないのに。

「だが反射の魔法は一回しか効果がねえ！今度はもらったぜえい！！」

そう言つて男は次のボール魔法を放つ。

当然魔法は跳ね返った上、今度は威力も上がってた。

『ついでに増幅の魔法もかけちゃった。』

首元ですりすりしながらハルがご機嫌で教えてくれた。

さつすがハル！そのうち星のついた短い杖と黒くて先のちよつと折れた三角帽子をかぶって魔法を使ってほしい。帽子のつばからは角がぴーんと飛び出してきつとかわいいに違いない！しつぽを振り振り杖をくるくるする度に星が散らばって、えーい！の掛け声で魔法が発動・・・あつぶな！もうちよつとで鼻血が・・・

声を出すと不審に思われるのでハルにすりすりし返すだけに、ずびつと鼻を嚙って男を見た。

顔面蒼白で腰を抜かしたように尻餅をついて、地面についた両手で上体を支えている。

一歩踏み出しただけで男の体が大げさなほど震えた。

「どうすればいいか、わかるよね？」

数件同じ目に遭って、当面の路銀が出来たと財布の紐を締める。さらにもう一件遭遇して相手が勝手に自滅したとき。

「君、ちょっといいか？」

そう声をかけてきたのは灰色の全身鎧だった。

12 討伐への勧誘

歩く鎧は言った。

「次の討伐に加わってくれないか。」

と。

もちろん断る。

何の討伐かは知らないけど、そんなことしてるヒマなんてないから。私には崇高な使命があるのだ！

ハルを精一杯守りハルを目一杯慈しみハルをこれ以上なく幸せにしハルを愛情一杯愛で撫で舐めまくりハルを深淵の底よりも深く愛し尽くしてハルとのでれでれらぶらぶ生活をハルとともに送るという輝かしい未来のために私の寿命を延ばす魔法かアイテムを手に入れるという使命が！！

「せっかくのお誘いですが、お力になれず申し訳ありません。」

ぺこつと頭を下げて路地裏から去ろうとする。

「あ！待ってくれ！君ほどの力があれば助かるんだ！頼む！謝礼ならなるべく出そう！どうだ！？」

「出来ません。」

「そ、即答か。少しも迷わんとは・・・何故だ？理由くらい聞いてもいいだろう？」

理由？

そんなに聞きたいなら教えてあげよう。

「私には使命があります。それだけです。」

そつとハルを見つめて微笑む。

ああ、和む。見つめ返してくるハルのくりつとした海色の瞳なら何日でも見つめていたい。ずっと見つめていたい。

じつとハルを見つめすぎて少し鼻息が荒くなる。

そこでハルがちよいちよいと袖を引いて鎧を指差した。

そうだ、人がいたんだったね。

しかし何をどう誤解したのか、慌てたような鎧が体の前で手を左右に振り始めた。

「すまない！そんな病弱な体だとは知らず無体なことを言った！今のは忘れてくれ！」

「・・・では、失礼します。」

意味がわからなかったが、もう一度鎧に頭を下げてからその場を去った。

二度あることは三度ある。

あのあと三度どころではなく鎧たちに勧誘された。

原因はばかすか貯まる路銀の元。

路銀が貯まるにつれ、思い出したように鎧に遭遇する。

たぶん鎧の中身は別人だと思うけど、ほとんど区別がつかなかった

から鎧と話たび鎧が同じすぎてデジャヴを体験した気になった。

そしてこの鎧も。

「そのあなた、次のフレイムドラゴン討伐に参加してくれませんか？」

え？今、ドラゴンとおっしゃいましたか？

ちらつと鎧を見た瞬間、ぎゅつと小さな手に腕を握られる。

ハルを見ればうるうるした瞳で浮気はダメって言ってた。

わかってる、わかってるよハル。ハル以上の竜なんて私にはいないから。

安心させるようにハルに微笑んだら鎧がぱちぱちと拍手した。

「参加してくれるんですね？ありがとうございます！最高褒章はフレイムドラゴンの血もしくは鱗です、よろしく願いしますね！！」

あ、と思ってるうちに言い逃げされた。

迂闊！断られないように見事な俊足で走り去った全身鎧の総重量を知っておくべきだったのだ！

呆然と砂煙を見つめているとハルが小さな手で指先を握ってきた。

『これに参加してみよう。』

急にどうしたんだろうと首を傾げて見つめれば、ハルがいたずらっ子のように笑った。

『ぼく、フレイムドラゴンの血が少しでいいから欲しいんだ。』

12・5 ハルのミライ（ハルミ視点）

ぼくは歓喜した

思いもよらないところで耳にした

ぼく以外の竜の存在に

竜の血

それがあれば、ぼくの願いが一つ叶うから

竜の血は人の命を数年延ばす

でも、それだけじゃない

竜の血は肉体を強化する

ぼくの血は彼女には強すぎる

一滴でも彼女を死なせてしまつくらい

だから、竜の血を手に入れよう

その後ならばくの血にも耐えられるから

そうすればずっとずっと、いつまでも一緒にいられる

ぼくと同じになった愛する彼女とふたり、いつまでも

ああ、そうだ

彼女には黙っていよう

終わりのこない明日に、絶望しないように

13 ギルドに登録

開けっ放しの小ぢんまりした建物の横に立て看板があった。

“ご自由にお持ち帰りください”

下にあるトレイの中には紙切れが数枚入っている。

“勇者求む！”

君もフレイムドラゴンの討伐に参加して榮譽を手に入れよう

！！

説明会予定日 ユヌの月 三日 正午より別館第一会議
室にて

討伐実施予定日 ユヌの月 十日 雨天決行

奮ってご参加ください！！”

立て看板の上では、板を嵌め替えて表示するタイプのカレンダーが
今日はユヌの月二日だと示していた。

町の人にギルドと呼ばれる小ぢんまりした建物に入ると、ロビーにいた何人かがこつちをちらりと見てから視線を戻す。

窓口が5つ並び、各々に数人ずつ並んでいる。

一番左端の窓口に並ぶと、みんなお金を受け取るだけだったみたいですぐに順番が回ってきた。

イスに座るとハルを膝の上にのせる。

「ギルドに加入したいのですが、どうすればいいですか？」

「かしこまりました。」

イスに座った綺麗なお姉さんが心得たとばかりににっこり笑って、一枚の用紙をカウンターに広げる。

「こちらにお名前をご記入ください。」

差し出されたペンを受け取り、言われたところに名前を書く。

次にお姉さんは薄いカードをくれた。

「ではこちらにもお名前をご記入ください。」

お姉さんの字で日付の書かれたカードは裏面に紙を貼り付けた金属の板だった。

表には紋章のような刻印があり、鳶の絡まった二匹の竜が追いかけるようにして相手の尻尾に噛み付いている。

かっこいい……

竜の模様を見つめているとお姉さんがコホン、と咳払いをした。

顔を上げると、お姉さんが引き攣った笑顔を浮かべている。

すみません、つい。そう思って軽く頭を下げてから名前を書くと、お姉さんがカードを受け取って先ほどの用紙の上に置いて割り印を

押した。

カードの表と同じ図柄の左半分が、カードの裏にくつきりと残っている。

イスに座ったままのお姉さんが後ろを向いてカードを何かにかざすと、カードをトレイにのせてカウンターの上に置く。

「これでギルドへの登録は完了です。お疲れ様でした。」

手に取ったカードは硬めのラミネート加工がされていた。

素晴らしい技術である。

これで多少手荒に扱っても、この素敵な竜の紋章が汚れることはないのだから。

じっと見つめていると、またしてもお姉さんがコホンと咳払いした。

「ギルドについてご説明致しますか？」

ハルを見れば首を縦に振る。

ギルドについてハルも知らないと言っていたからちようどよかった。

説明を聞いた。

最重要事項として魔物を倒せばお金をくれるところというのはわかった。

あとは依頼のランクが高くなるほど報酬も高くなるそうだけど上げすぎると目立つだろうし、ゝ退治とかの依頼を名指しで命令されたりするとか。

やっぱり目立たないためにもランクは上げない方が良い気がする。

それに私には崇高な使命があるのだ。

左手にハルを抱き、右手でカードを掲げて立ち上がる。
キラッと光る笑顔でお姉さんを見下ろした。

「どうもありがとうございました。」

「い、いえ、こちらこそ・・・」

引き攣った笑顔でお姉さんは手を振ってくれた。

町から離れた夜の草原は涼しかった。

人に見られないために夜にしたけど、とあたりを見回す。
誰もいないのをハルも魔法で確認した。

『やるよ?』

見上げて言うハルにこくりと頷く。

「うん、まずはハルの魔法がどれくらいのものか知っとかないと。」

魔法学校エリートコースのハルを思い描いて前方を見た。

腕の中から何の動作も呪文もなくハルが魔法を放つ。

あたりの草原が一瞬で燃え上がり瞬時に燃え尽きる。

あとに残ったのは大半がはげた大地になった草原だった。

14 初めて之夜（前書き）

ご注意ください

相手は竜ですが、たぶんR12くらいだと思います。

14 初めての夜

ついにこの時がやってきたのね。

ハルと出会って初めての記念すべき夜。

それを宿の一室で過ごすことになって、街でも大きな五階建ての建物に入る。

だがしかし！残念なことにここにスイートなんてものは存在しなかったのだ！

仕方ないので最上階の角部屋を頼む。

ハルを抱っこしたまま部屋に入り、即座に鍵をすると室内を見回した。

10畳ほどの広さにシングルサイズのベッドが2つ、テーブルとイスのセットが1つ。

薄そうなお壁にはハンガー掛けがついている。なんとというシンプルさ。奥の壁に扉があるから向こうはトイレとお風呂なんだろう。

ハルの防音の魔法がなければ隣に丸聞こえではないの？という有様にがっかりする。

続きの小部屋にトイレとお風呂の確認に入って、ベッドの上に座ってるハルを振り返った。

「は、ハル！この世界にお風呂はないの！？」

すごい形相で振り返ったのか、ハルがびくつとした。

『お、お風呂？』

「そうよ！入浴！お湯を・・・うーん、部屋で温泉に入る感じ？」

『えと、ここにミチルの言うようなのではないと思う・・・』

どこかどきまぎと言うハルを覗き込む。

『たらいに水を張って、そこで洗うのが一般的、だったはず・・・』

ハルがちらっと、小部屋の壁に立て掛けられている大きなたらいを見る。

浅くて大きいそれは、そうするのに適しているような大きさがあり、確かに小部屋はタイル張りでたらいを置きそうな広さもあった。

どうやらこの100年で浴槽は発明されなかったようだ。

ふと、そわそわしているハルを見るとぴゅっと顔を逸らしてもじもじしている。

これは、もしかしたら良い機会かもしれない。

薔薇色の未来のために。

小部屋に入ると隅に大きな排水口があるのに気がついた。

石鹸で先に手を洗ってからたらいも洗う。

よく濯いであら蛇口の下に置いて水を溜め始めた。

「ハ・ル。」

ハルに近づき、にこっと微笑むとハルが何？というように首を傾げて見上げてきた。

「洗ってあげるね？」

ハルを抱き上げて意気揚々と小部屋に入る。

しばらく腕の中でじっとしてたハルが、はっと気づいたように手を振り出した。

『や、ぼっ……ええー!』

よくわからない声を出してハルが逃れようとする。

「もしかしてハル、水浴びとか嫌いなのか？」

脇の下に手を入れて目の高さまで抱き上げるとハルはぶんぶんと首を横に振る。

『き、嫌いじゃないけどこれはちよつとその……!』

何だか焦った様子でぎくしゃくしてるハルのほっぺにちゅつとする。ぴつとハルの動きが止まって、ぷしゅうと空気が抜けたように頂垂れた。

たぶん諦めたんだと思う。うへへ。

緩む頬のまましゃがみこみ、ハルの背中から水をかけようとしてふと思った。

竜が変温動物だしたらいきなり水じゃ寒いんじゃない？

「ねえ、これお湯にできる？」

『う、ん。お湯にするのは簡単だけど……ねえやっぱりやるのか？
ぼく一人で入れるからミチルだけで……』

「もう！妻が自分の夫を洗って何が悪いのよ！」

ハルのほっぺをむにゅむにゅしながらハルの口にぶちゅつと口付けた。

今までの軽い触れ合いじゃなくて長くくつつけてぺろつと舐める。驚いたようなハルが少し口を開けたおかげで、舌は簡単に入った。少しひんやりしたハルの口内を獲物を探すようにして舐め上げる。次第に、硬直して目を見開いていたハルの瞳がとろーんとなつてう

るうつりしてくる。

呼吸が荒くなり、ふるふる震えるハルの両手がワンピースの胸元をぎゅっと握り締めてしっぽがぴんと伸びていく。

「・・・ふ、うん、ミチ・・・」

牙の先がちよつと痛かったけどハルも気をつけてくれてるみたいで、嫌がってないことが嬉しかった。

その後はお風呂にも入らず、何度もちゅーをしてハルを抱き締めたまま眠りについた。

15 熱い説明会

会議室の後ろの出入り口から中をのぞくと、結構人が入っていた。ざわざわとした室内に入り、後ろのほうのイスに座る。

膝にのせたハルがあたりをきよるきよる見回してて、その可愛さに思わずため息が出た。

見上げてきたハルがどうしたの？と首を傾げると今度は鼻血が出そうになる。

あぶない、こんなところで出しちゃ放り出されかねない。

昨日のことを思い出さないようにも気をつけながら鼻を押さえると、時間になったのか会議室の前の出入り口から大柄な男の人が一人入ってきた。

壇上に立つと全員が席に着くのを見届けてから、すうつと息を吸い込む。

「よくぞこれだけ集まった！！諸君らの勇氣に感謝する！それではフレイムドラゴン討伐について詳しく説明していく！ジェアン！」

「はい！」

元氣よく返事をしたジェアンと呼ばれた細身の男が入ってきて大柄な男の横に立った。

「その前にまず報告があります。昨晚のことですが、そのナジユ草原でフレイムドラゴンが広範囲型火炎魔法を使ったことが確認されました。被害は甚大、草原の6割が消失しています。これは我らに対する警告、もしくは挑戦と受け取っていいでしょう。」

あれ？どこかで聞いた話だ。

報告書を読み上げたジェアンに対して室内が騒然となる。

「広範囲型だっ！」

「やはりドラゴン、侮れぬな。」

「6割とは・・・さすがというべきか・・・」

「だがこちらの人数は多い！いかにドラゴンといえど・・・！」

「いや、一番の問題はドラゴンブレスじゃ。あれは避けるしかないぞ。」

ざわざわと騒ぎ出した人々とフレイムドラゴンに謝りたかった。

それはきつと昨夜のお試し魔法だ。

でもこんな大勢の前で訂正できないし、目立ちたくもないし。

これは先にフレイムドラゴンに謝っておいたほうがいいかもしれない。

ハルを撫でながらため息を吐いた。

「そんなに怖いなら無理せず帰れ。足手まといだ。」

ハルにすりすりしてもう一度ため息を吐く。

「お前のようなガキがいまいが何ら影響はない。家に帰っておとなしくしてるんだな。」

そういえばフレイムドラゴンってどこにいるんだろう？この後の説明で言ってくれればいいけど。そしたら謝りに行けるのに。

「ったく・・・誰がお前みたいなガキを連れて、って、聞いているのか!？」

唐突な隣からの怒声に驚いてそつちを見ると、とても柄の悪そうな男が足を組んでこつちを睨んでいた。

見た目は20代。脱色しまくりのような褪せた金髪に焦げ茶のメッシュが入った髪はやや短く、両耳には5、6個ずつ原色の石がつい

たピアスをしている。ショート丈の黒いブーツに濃藍のスボンを一ツインして、素肌もあらわな紫のシャツは胸元が絶妙に開いていた。

ただ、灰色の目が人を射殺せそうなほど鋭すぎて、見えてないだろうけど慌ててハルを抱き締めた。

私はこの人を知らないし、この人も私を知らないはずだ。

この人がどうして怒ってるのかわからなかった。

ねえハル、何があつたの？

ぎゅっと抱き締めたハルの耳元で小さく囁くと、透過と防音の魔法がかかっているハルも声を潜める。

『ぼくもわかんない。どうも独り言を言ってる怒り出したみたいだけど・・・』

ああ、こんな短気な人の隣になるなんてついてない。

さらにハルを抱き締めてため息を吐いた。

「しかしだ！諸君！！」

突然の大声で室内を黙らせ、視線を集めた大柄な男は豪快な笑みを浮かべた。

「これだけの人数がいるんだ！挟み撃ちさえできれば楽勝だろう！
！背中に攻撃を集中すればいかにドラゴンといえど軽傷では済むまい！！」

「「「おおおー！！」」」

どよどよと室内がどよめいて、顔を見合わせるものがそこかしこにいる。

これはいける！とか言ってるけど、そもそもどうしてフレームドラ

ゴンを討伐したいんだろう。

畑に被害がでるとか？ 追いつくだけじゃだめなの？

私は討伐に参加してくれって言われただけしか知らないから、理由をきちんと知るべきかもしれない。

ハルを見つめ、頭をなでなでする。

ハルみたいに話せばわかってくれる竜だっているんじゃないのかな。もしかしたら血だってわけてくれるかもしれない。

そう思いながら話の続きを聞いていた。

16 ハルとの食事

会議室から出たところでギルドカードの提示を求められた。

まわりの人も求められてて、各々提示している。

私もカードを提示したところ・・・あれ？なぜかちらつと顔とカードを見られた。

感じるーい。

むっとしたのがわかったのかギルドの人が石のようなものを取り出した。

それをカードにかざすと、カードの上にほわわーんとイスに座る小型化した私が浮かぶ。

素晴らしい技術である。

でもそんなの撮影された覚えがないんですけどね。盗撮だよ、それ。まさかスカートの中とか見えないよね？

それにしてもみんな提示して素通りなのに一人だけ立ち止まってるのって結構目立つ。

だいたい疑われるようなこと何もしてないのに。

もしかして拾った他人のカード持ってると思われてるか？

でもこんなの偽造し放題じゃないの？名前書いただけだし。

ギルドに入ればお得ですよって何人目の鎧が言ってたから入ったのにさぁ・・・

しばらく確認していたらしい人から目の前にどうぞ、とカードが返される。

たぶん、入ったばかりの最低ランクが冷やかしかよとか思ってるんだ。きつとそうだ。ぺっ。

受け取ったカードをさっさとポケットに入れてギルドの建物を出た。

宿に戻って部屋で早めの夕食を食べる。

この世界のメニューは焼いたお肉とかゴルフボールくらいの蒸かしたお芋とかスープとか、そんなどこか見たことのある素材の味を生かすような料理ばかりだった。

二人分のメニューが並んだ丸いテーブルの上にハルが座り、真剣な表情でお皿を見ている。

ああ、とっても癒される・・・

小さな手で慣れないフォークを使ってお芋を刺そうとしてる姿すらもう！

何度か失敗してやっとお芋をフォークの先に刺し、でも何度もつついていたお芋はぼろぼろと砕けてしまった。

あー！みたいな顔をしたハルに表情に出さないように悶えまくる。

隠そうとしても口元はニヤついているけどそれは仕方ない。

黙ってお皿の上で砕けたお芋をじっと見てるハルは撫でて抱き締め、頬擦りしたいくらい可愛かった。

まあ、やったけど。

腕の中にいるハルの前に、私のフォークに刺したお芋を差し出す。うるうるした瞳で見上げてきて、しょぼんと頂垂れた。

『不器用で、ごめんね・・・？』

「うっうん！そんなことない！最初より断然上手くなってるし、ハルはそのままが良いんだから！それにハルにアーンができる楽しみが無くなっちゃうじゃない？」

笑顔でハルを覗き込み、ね？とほっぺにキスをする。

『うん、ありがと。そ、それじゃあ・・・』

もじもじと見上げあーんをするハルにお芋を入れてあげた。

交互に食べて最後にデザートのチーズケーキも食べる。

ふー、今回も悶え死ぬかと思った。

食後の一息について、今後のことを考える。

フレイムドラゴンの討伐までまだ日はあるし、先に謝りに行ってその時できれば血もちよっとわけてもらって、ついでに出て行ってもらえたら万々歳なんじゃない？

フレイムドラゴン側の理由はまだ聞いてないけど、人間側のはわかったし。

昨夜の草原のもう少し遠くにあるらしい岩山付近に住み着かれたせいで、そこで鉱石が掘れなくなったとか。

だいたいはその手前の何とか平原にいるらしいから、探すならそのへんからかな。

抱っこしたままのハルを見れば、胸に縋るようにしてびすびす寝息をたてて眠っている。

ふっふっふ！こんなこともあるのかと鼻栓をして鼻血対策はばっちりよ！

ちよっと漏れたけど・・・

17 フレイドラゴンにご対面

『迷い込んで来たただけなら去れ。』

結構距離があるのに聞こえてきた低めの声に顔を上げる。

ちらつと、夜の平原のずっと向こうに赤く光る何かが見えた。

ハルのときは竜と話ができて嬉しかったことしか頭になかったけど、やっぱり頭に直接語りかけるような喋り方は少しだけ違和感がある。まあそれもハルで慣れたから驚かないけど、この距離で話しかけてきたことに対しては驚いた。

まだ500mはあるみたいだから。

『ふつ、驚いたか。我は火炎を従えし炎竜。人間の子供よ、命が惜しくば早々に立ち去るがいい。』

すうつうつと息を吸う。

「もしもーし！こっちの声って聞こえますかー！」

なるべくお腹の底から出した大声もこの距離では届かない気がした。

近づいて、徐々に見えたその姿は背中側が朱色に近い赤でお腹側は淡いベージュ。背中のがみと揺れるしっぽの先では炎が生きているように燃え上がっていた。

さつき赤く光ってるように見えたのはきつとあれだったんだ。

しかし100mあたりまで近づいたとき、挨拶もしないうちに交渉は決裂した。

ハルより小さいけど、それなりにでかいフレイムドラゴンの一方的な先制攻撃によって。

なんて喧嘩っ早い竜だ・・・

『ふつ、私の魔法を跳ね返すとはなかなか見所のある人間のようなのだ。が・・・それは一度しか効果がなかったのではないか?』

しっぱをびたん!と振り下ろして構え直したフレイムドラゴンの胸の前に、再び一本の燃え盛る槍が現れる。

その口元がニヤツと笑うと真っ直ぐ炎の槍が飛んできて、当然、跳ね返った。

炎でダメージは受けないのかフレイムドラゴンは避けもせずに、眉を顰め目を見開くという至難の業をやったのけ、ふと何かに思い当たったような顔をした。

『そうか、あの球状の魔法道具のせいだな?いくつ持っているかは知らんが・・・笑止!』

そう言つて一吼えしたフレイムドラゴンの体の前に、狙いを定めた二十本くらいの炎の槍が現れる。

『この数には耐えられまい!残念だったな小娘!』

言い終わってから連続で放たれた炎の槍が、やっぱり全部跳ね返っ

た。

『なっ！？何をした！』

「私は特に・・・」

ハルがすいだけです。

そう思つてばそつと告げると、フレイムドラゴンが激昂した。

『ここまで虚仮にされて黙っておれぬわっ！！』

「黙つてなかつたつて。」

な、なんだろうこの感覚・・・

この竜おもしろいかも。

ニヤニヤしていると、ぶるぶるしていたフレイムドラゴンがぐわつと目を見開いた。

『これで仕舞いだっ！小娘え！！』

天を衝くような咆哮を上げ、長めの首を振りかぶるように曲げると向こうを向いた口のアたりが白く輝いているように見える。

風の唸りをまといながら戻された首と頭。

その口の中には高温らしき炎の塊が渦巻いていた。

まあ、こうなるよね。

疲弊して寝そべった大きなフレイムドラゴンをつんつんしながら声をかけた。

「少しでいいから話聞いてくれない？」

『・・・なんだ。』

もう起き上がる気力もないのか、目だけを向けてくる。

「あっちの草原ちょっと焦がしちゃったの、あなたのせいになってるの。ごめんね？」

『・・・あれはお前だったのか・・・あんなもの、見過ごせるわけもなく様子を見に行ったのだが・・・』

「あー、そのときに勘違いされちゃったんだね。かわいそ。」

『かわいそって、お前・・・』

呆れた一瞬で感じて前に視線を戻したフレイムドラゴンをさらにつんつんする。

「でさ、謝るついでにちょっとお願いがあるんだよねー。」

今度は瞬き一つしてから無言で見てくる。

たぶん、なんだって言うてると思う。

「あなたの血がちょっと欲しいんだよね。どう？ちよつとでいいの。献血すると思つてこの小瓶にちよつとだけわけてくれない？」

ポケットから取り出した親指ほどの小瓶を視線の先で軽く振る。

『それを、どうする気だ。』

訝しげに見るフレイムドラゴンを見て、ハルを見た。

「さあ？知り合いが欲しいって言ってるだけだから・・・」
『・・・ふん、まあいい。その程度ならくれてやる。』

どっこいしょ、という感じに赤い腕を持ち上げて鱗だらけの指先が近づく。

指先からつつつと垂れた黒っぽい血が、鋭い爪を伝って小瓶に注がれた。

「ありがとう。」

ハルを腕に抱きこんで、小瓶の栓をすると布に包んでポケットに戻した。

赤い腕を下ろしてまだ寝そべっているフレイムドラゴンを見つめる。

「あと何日かしたらあなたの討伐に人間がたくさんやってくるよ。もし用がないなら早くここを去った方がいいと思う。」

静かに視線だけで見上げてくるフレイムドラゴンをじっと見つめ返す。

『ああ、そうさせてもらおう。ここに執着があるわけではないしな。』

はふーっとため息を吐きまた視線を前に戻すと、しばらくしてちらっとだけこつちを向いた。

『・・・小娘、我に名をつけるといい。』

なんというこ

『だめ！！だめだよミチル！竜に名前をつけちゃだめ！』

突然ぎゅうつとワンピースの胸元を握り締めて叫んだハルを撫でて、どうしたの？と見下ろす。

ハルは必死な様子でぶんぶんと首を振って、泣きそうな瞳でふるふる震えながら見上げてきた。

『名前をつけると縛られちゃう！ミチルはぼくのなのに！！』

っ！！

慌てて押さえたけど漏れたものは取り返せない。

今回もハルに被害はなかったけどフレイムドラゴンには被害があった。

突然大量に鼻血を噴いた私をぎょつとしたように見てから自分の肩にかかった鼻血を見る。

ごめん。ちゃんと拭くからちょっと待ってて。

ぎゅうつと抱きついていいるハルの背を撫でながらハンカチを探していると、フレイムドラゴンがゆっくりとその重い体を地面から起こした。

『・・・血の契約か、面白い。』

何か格好良いことを言って、ばさりと赤い翼を広げたフレイムドラゴンが地面から浮き立つ。

もうちょっと待ってよ、まだ拭いてないんだから。それとも自分の体が赤いから鼻血なんて目立たないと思ってる？はっはっは、残念でしたー、時間が経つと変色するの知らないの？

ハンカチを持った右手で追いかけたフレイムドラゴンが、すぐに手の届かないところまで飛翔した。

『その期待には応えよう。だが今は休ませてくれ・・・』

疲れた声でそう言って、フレイムドラゴンは夜空の向こうへ消えていった。

溶けた大地と私たちを残して。

願わくはフレイムドラゴンがお風呂に入りますように・・・

17・5 酔っ払いの戯言（ある酔っ払い視点）

それは偶然だった。

賑やかな街の喧騒から離れて、一人静かに酒を飲んでいた。夜空を薄く雲が覆い、月も霞んでいる。

わずかに酔い、空になった酒瓶を片手に立ち上がろうとして、ふと暗闇の奥に目を凝らした。

赤みを帯びたものが街を取り囲む高い城壁に沿って移動していれば誰だって興味を引かれるだろう。

遠見の魔法を使い焦点を合わせれば、それは昼間のガキだった。

ギルドの別館にある第一会議室に入って、ざっと見回して持った感想は、おー結構有名どころが揃ってんなあ。だった。

どこに座ろうか眺めた中に、まるで空席のように空いた空間に座る小さな人影があった。

よく見れば、何も持っていないのに頻りに何かを撫でているような手つきの妙なガキだった。

戦闘向きではないシンプルな赤いワンピースに黒い靴。

14、5に見えるが16、7と言われても、まあ納得はできそうだった。

ちょうど空いていた隣に腰掛けてじっと見下ろしても無反応。

武器を持っているわけでも熟練した魔法の使い手でもなさそうな様子に、今からやることわかってんのか？って聞いてやりたかった。

あのガキがこんな時間にふらふら出歩いてることなど俺には全く関係ないことだが、向かう方向には関係がある。

興味本位か手柄独り占めを狙ってんのかは知らんが、今あれを刺激して街まで来たらどうするんだよ。

ちつと舌打ちして止めようと後を追うが、街を出たとたんガキの歩く速度が急に上がった。まじかよ。

ここからでは魔法を使った素振りは見えなかったが、きつと巷で噂のあれでも使ったんだろ。

封じ込めた魔法をキーとなる言葉を口にすることで発動させる代物らしいからな。

だが便利な反面、結構値が張るマジックアイテムだと聞いていたが、あんな田舎くさそうなガキが持っているとは驚きだった。

自分に速歩の魔法を掛けるのに少しばかり時間を食って、あのガキを見逃したかと思ったがなんてことはなかった。

やはり目指したものはドラゴンだったようで、遮るもののない夜の平原にすぐにその背中を見つけることができた。

しかし同時に、赤く立ち昇るフレイムドラゴンの魔力も視界の端に捉えてわずかに焦る。

あの距離じゃもうすぐフレイムドラゴンの意識範囲にあのガキが入っちゃう。

何とかしてあのガキを、そう思った瞬間、ありえないことが起こった。

「もしもし！こっちの声って聞こえますかー！」

お前はアホか！

首根っこを掴んでぐくぐく揺らし拳骨を食らわせてやりたい。
しかし俺が追いつく前に、あのガキに一本のフレイムランスが襲いかかった。

最悪だ。

いきなり中級魔法をぶっ放してきたフレイムドラゴンに足が止まる。しかもっと最悪なのはそれを反射の魔法で完全に弾き返したガキだった。

一般的な反射の魔法はある程度の魔法なら完全に跳ね返せるが、中級以上になるとけると完全とはいかなくなる。

それをやってのけたということは、あのガキが使っているのが一般的な魔法を封じ込めただけの例のマジックアイテムなどではなく、自分の魔力を使った自分の才能による魔法ということになる。

俺も王宮筆頭などと呼ばれてはいるが、ガキがこんなに完全な形で中級魔法を跳ね返す場面なんぞ見たことがない。

目を見張る俺の視界で、さらにもう一発フレイムランスが放たれた。今までの中であのガキが何かした様子は無かったが、それも完全に弾き返したガキの前に今度はフレイムランスが20近く出現する。

もはやさすがドラゴンとしか言えなかった。

詠唱なしのうえ、制御の難しい中級魔法を20近くも同時に操れるなど。

格が違うすぎる。

終わったな・・・

あれを連続で受けるには反射の魔法では意味がない。

あのガキがさつきからバカの一つ覚えみたいに使ってる反射の魔法で防げるのは最初の一発だけ。

弾くという性質から反射の魔法に重ね掛けはできない、ゆえに必要なときは効果が切れる度に掛け直すのが暗黙の了解になっているが

当然そこに隙ができる。

その隙を狙って、まさかフレイムドラゴンがあんな手を使ってくるとは……

前段階として火の耐性を上げ、対魔法防壁をかけていたとしてもあの数じゃあ無理だろうな。

俺は……夢を見ているのか？

それとも、まだ酔っているのか？

諦めの視線を向けていた先で、全てのフレイムランスが完全に弾き返されていた。

ありえない。それすらどこか呆然とした頭ではよくわからなかったが、弾き返されたそれらを順次掻き消したフレイムドラゴンが突然ブチ切れたような咆哮を上げたことで、はっと我に返る。

首だけで後ろを向いたあれが何をしようとしているのか瞬時に察した。

来る。

ドラゴンブレスと呼ばれる、防御魔法無視のタチの悪い一息が。フレイムドラゴンの意識範囲外の距離から遠見の魔法で見えても寒気がする。

間近でその恐怖に身が竦んだのか、あのガキは微動だにしていない。

そして、一筋の白い閃光が見えた直後、直視できないくらいの光が

微動だにしなかったあのガキを呑み込んだ。

しばらくして眩しさに顔を背け手を翳していた肌にも、呼吸するのが嫌になるほどの熱が襲い掛かる。

骨も残ってねえだろうな・・・そう思い、ある程度治まってからゆつくりと目を開けた先には、どろどろに溶けた大地とその上にぽつんと立ったガキがいた。

どうやったのかは全く想像もできなかったが、あのガキは確かにドラゴンブレスを食らったはずだ。

それも真正面から正々堂々と。

それからしばらく似たようなことを繰り返しているのを観察していたが、やはり種はわからなかった。

そのうちフレイムドラゴンが地に倒れ伏したことで、この戦いの決着は着いたようだった。

立ち昇る魔力も感じない。

はっと気づいて、こんな好機見逃せるわけもないと急いで街に戻って杖を手にとり仲間を集めたが、再び平原に来てみればフレイムドラゴンもあのガキもいなくなっていた。

仲間には酔っ払いと罵られたが、ただ溶けた大地だけはその存在を証明していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6659m/>

ハルミチル

2010年12月2日21時00分発行